
生き残るには.....

シャム猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き残るには……

【Nコード】

N2344Z

【作者名】

シャム猫

【あらすじ】

あるウイルスが世界中に流行し日本でもゾンビに対抗するために徴兵された少年少女の物語です

チャプター0（前書き）

どうしてもゾンビ物が書きたい！

そんな風に思ったのが運のつき気がついたら投稿してました
ですので気ままに長い目で読んでください
ちなみに不定期更新です

チャプター 0

ガタツガタツ

俺は揺れで目を覚ました

目の前には学生服を着ている俺と同じ年位の高校生が虚ろな目で膝を抱えてる

そいつの隣の奴も同じようにしている20人位が乗り込んだ軍用トラックは山道を走ってる用に揺れが激しい

「おい、大丈夫か？」

隣の少年が声をかけてきた

紺色のジャケットに赤と緑のネクタイ身長は俺と同じくらいだ

「ああ……大丈夫」

「俺は五十嵐拓海歳は16。よろしく」

爽やかに笑う青年。なかなかイケメンだ

「大久保光樹同じく16だ。よろしく」
取り合えず握手する

「顔色悪いよ？どうしたの？」

「……どうしたんだっけ？」
なんだろうと思い出せない

「変わってるねー」

拓海が笑いながらしゃべる

するとちょうどトラックが止まった

「降車開始！ぐずぐずするな！」

一番奥にいた男が叫ぶ

「おっと。じゃあ行こうか。」

拓海が腰を上げる

続いて俺もトラックを降りる

広いグラウンドを見下ろす用にその建物がそびえ立ってる

パツと見たら学校の用だがじっくり見るとおかしいところが見えてくる

駐車場に停められた戦車やAPC

入り口に設置された機関銃陣地

アサルトライフルを肩に担ぎ校庭を歩く高校生

そしてそれらを囲む有刺鉄線（電流つき）

「来ちまったな……兵士養成学校」

20××年 人類が絶滅危惧種に認定された

事の発端はひとつのテロから始まった

あるテロリストが某国の細菌研究所からあるウイルスを盗み出した
そのウイルスは人に感染しそのウイルスに犯されると人は理性を失

ただ食欲を求めるゾンビになるのだ

そのウイルスが恐ろしいスピードで世界中に流行一年も経たないうちに世界の人口は半分近くになった

それは日本も影響下にあった

半月で日本国民の6割がゾンビになったため日本政府は『対ゾンビ交戦条例』を作った

簡単に言えばゾンビ相手なら銃とか撃つてもいいよというものだったそして政府はもうひとつ法案を作った

それが徴兵令だ

元々警察や自衛隊など戦う戦力が少なすぎる日本は苦肉の策として第二次世界大戦以来の徴兵制度をとった

満16歳以上の少年少女は特定の教育機関に行くそれが兵士学校

ここで兵士としての教育を受けてそのままゾンビ討伐や避難所の警備などなど色々な仕事を任せられるそうだ（所長の長い演説の一部抜粋）

そして今年で16歳を迎えた俺は実家の静岡県からトラックで揺れること4時間東京の訓練所に来たのだ

チャプター0（後書き）

今回は紹介だけです

次回からガンガン戦闘シーンとか入れてきます
ご意見感想お待ちしております

まずは説明からだよ手抜きじゃないよ！（前書き）

どうも不定期更新なので次出すのは明日なのか明後日なのかわかりません

あと他の作家様との表現が被ってしまったりした場合はどうか温かい目でスルーしてください

まずは説明からだよ手抜きじゃないよ！

「ぐずぐずするな！走れ！さっさとしろ！このノロマどもが！」

元陸上自衛隊の長田輝彦教官が鬼のような、いや鬼以上の剣幕で訓練兵（最初のトラックに乗ってた20人）に激を飛ばす

「遅いぞ！もう10周！」

新兵達の疲れた声を出す

「これじゃあいつ終わるかね？」

拓海が流れる汗をぬぐい走りながら話しかける

中学時代は陸上部の長距離走者の彼は持久力はあるようだ
かくいう俺も陸上部だが専門は短距離さすがにバテてきた

「しかし訓練がここまできついとは……」

さすがに五十嵐も苦しそうだ

ここでの生活もなんだかんだ言ってもう一週間だがキツイ

朝は5時起きで10kmランニングに腹筋、腕立て共に2000回
そのあと朝食の後に10分の休憩の後で朝のメニューを5セット＋
けんすい、アスレチック、エトセトラ

とにかく大変なのだ食休めの時間だけがゆうつ休める時間だ

「やっと休憩時間かー」

朝の訓練が終わり朝食を食べたあとの休憩時間拓海と寮の（ちなみに同じ部屋）でくつろいでいると

「すみません。大久保は……っているし」

同級生の西山明久

が入ってきた

小学校からの知り合いで小柄な体だが破天荒な正確に昔から変わらない童顔だが性格はかなりイタズラ好きの同じ隊の友人である

「何のようだ？」

そう聞くと

「同室の子が凄い無口でつまらないからこっちきた。」

「へえーその子名前は？」

「植野憂^{うえの ゆう}って言ってた」

「ああ、植野くんか。彼は人見知りなんだよ」
「どうやら五十嵐の知り合いのようだ」

「けど、あの子はなんであんなに無口なの？」

「さあ？」

首を傾げる五十嵐

「専門は狙撃科のはずだけど……」

「スナイパーか」

ちょっとした解説

民間兵士学校では選ぶ科目によって兵士としての役割が変わってくる

・歩兵技能科

主に避難所の警備や戦車随伴などを行う
ゾンビ討伐の要（大久保や五十嵐はここ）

・狙撃科

後方や遠距離からの支援を行う科目他にも索敵や監視など見張りも兼ねる

・情報技術科

通信や無線等情報網の管理を行う避難民の情報等も受け付けてる

・車両操作科

戦車やヘリを使って兵士や避難民の輸送や避難を手助けする

・整備開発科

銃や車両のメンテナンスや装備の開発等も行っ壊れた施設の修理等も行う

・衛生治療科

兵士や避難民の健康管理や薬の調合を担当する衛生兵として現場に行くこともある

・特殊工作科

各科目のエリートを集めた精鋭部隊一般兵立ち入り禁止区域の調査や政府の重要要人の身辺警護等を行う今の所十人の一個小隊が一つしかない

「スナイパーか……仲良くしたら援護してくれるかな？」

「彼は受けた恩は忘れないから。」

五十嵐君が頷く

「おい！そろそろ時間だ！新兵どもさっさと集まれ！」

グラウンドの中心からでも聞こえるくらいの音量で叫んでた

「ヤバイ！急げ！」

そうして三人で走り出した

まずは説明からだよ手抜きじゃないよ！（後書き）

短い……そろそろ銃とか出します
ご意見感想お待ちしております

どんな職場でも出会いは大事（前書き）

色々あって訓練のシーンは割愛しました
理由はめんどくさいからです

どんな職場でも出会いは大事

ガタツガタツ

そしてまた揺れで目を覚ます

狭い軍用トラックの中に20人位の少年少女が乗ってる

……デジャヴ

ただ前とは違うのは前にいる少年は迷彩服に身を包み右肩にM4カービンを背負ってる

そして自分も同じく迷彩柄の服に迷彩塗装のM4カービンを持つてる

「ついに初出撃だね。大久保君」

五十嵐が戦場に行くとは思えないくらいに爽やかに話しかけてくる

「ああ、何だかあつという間だな」

前回の話の後射撃訓練をしてそして一週間で兵士としての訓練が終了そして三等歩兵という階級を手に入れあれよあれよと言う間に銃を渡され気がついたらトラックの中だ

「……本当にあつという間すぎるな」

何だろうつこの悪意は？

「あ、あの……」

「はい？」

右から控え目な声が聞こえた

何だか凄く小さく縮こまっている少女を見る
小さな体の割りに長い黒髪が印書的な少女は彫刻の用に整った顔を
青くしながらしゃべる

「どうしたの具合悪いの？」

「い、いや！ 違うんです！ そうじゃなくてその…あの……」
なぜか涙目になりながら呟いた

「か、肩の虫を取ってください……」
猫に睨まれたネズミみたいになりながらも言う

「虫？ あ、本当だ」

彼女の肩にクワガタみたいな虫が乗ってた

「はい、とつたよ」

虫を掴んで外に投げる

「ありがとうございます。虫苦手で。私は天野陽奈あまの ひなです。二等衛生技師です」

そして軽く会釈

「どうも俺は大久保光樹三等歩兵」

「同じく五十嵐拓海よろしく」

「人との会話が苦手で何だか二人と喋るのはは心強いです。」

「俺たちも衛生兵と知り合いになれるなんて光栄だよ」
戦場的な意味で

「お前ら！搭乗前に確認したがもう一度言っとくぞ！今回の任務はゾンビ共に襲撃を受けた避難所の奪還及び避難民の誘導だ！他の兵士や噛まれた奴は敵とみなせ！」
長田教官が怒鳴る

「じゃあ大久保君そうなった時はごめんね」

「いや、まだ死ぬとは限らないし」

「ごめんなさい。大久保さん」

「陽奈さんまで！？」
これはひどい

するとちょうどトラックが止まった

「各員、降車開始！」

そして俺たちは銃を手にトラックを降りた

どんな職場でも出会いは大事（後書き）

ダグに「ゾンビ」を入れました
ご意見ご感想お待ちしております

初戦場（前書き）

やっところさ戦闘が始まりました
銃は作者の趣味が100%です

初戦場

避難所になっている小学校の校門に着いた
まず降りて見たのは血の海だった

右肩から先が無いもの

喉を押さえて死んでるもの

内臓を撒き散らしながら死んだもの

色々な死に方だが共通しているのは苦しそうな表情をしている事だ
降車した兵士達は吐き気を催したり中には知り合いの無惨な死に方
を見て泣きじゃくる者もいる

「Aチームは裏口を！Bチームは中庭に行け！CチームとDチーム
は俺についてこい！」

長田教官の声で兵士達が動き出す

「よしいくぞー！」

『おー！！』

俺と五十嵐はCチーム陽奈さんはBチームだ

「じゃ、また後で」

「生きて会いましょう大久保さん」
陽奈さんが笑いかける

「前方からゾンビの集団！」

「撃て！」

ダダダダダダダダダダ

「いくぞー！」

長田教官の号令で建物に突っ込む

避難民のいる体育館の前に数人の兵士がバリケードを建てていた

「増援だ！撃ち方やめ！」

銃声が止む

「行くぞ！各員敵を順次撃破！」

長田教官がMP5Kを撃つ

タタタ！タタタタタタ！

ダンダンダン！

ダダダダダダダ

銃弾をゾンビの頭に当てながら少しずつ体育館の入口に進む

「助かった。私は武藤修次二等歩兵です。」

「お前みたいなやつがここを？」

「長戸一等伍長は避難民を助ける最中奴らに……」
そこで彼は押し黙る

「よしわかった。中には何人位いる？」

「50人位です。」

「よしわかった。Cチーム！俺と一緒に避難民の誘導Dチームは」
ザザ《応答願う！》

《こちらBチーム！誰か応答を！》

連絡無線を背負った兵士のマイクから男の声が聞こえた

「どうした？」

無線機をとり話す

《中庭で交戦中見たことも無いような敵が我々をいきなり襲撃して
っああー！》

そこで無線は途絶えた

「おい！どうした？Bチーム！」

呼び掛けるが応答は無い

「くそっ！」

乱暴に無線機を戻す

「大久保！お前何人か連れてってBチームを援護しろ！」

「教官マジですか？て言うかなんで俺？」

「帰ったら教えてやるさあ行け！」
強引に言われたでしょう

「取り合えず五十嵐と西山来てくれ」

『わかった』

二人が頷く

「あと、木下お前もいいか？」

「いいですよ。」

きのした じん
木下仁女の子だが歩兵科でも突撃に関しては右に出る人はいない
近接戦闘に特化している

「武藤さん。案内頼めますか？」

「わかりました。こつちです」
そう言って走り出す

大久保達が体育館に着く少し前

「クリア！」

「こつちもだ！」

「中庭を確保した！車両班に報告しろ」

兵士達が生きたゾンビがいないか確認してるなか

「衛生兵！こいつを診てやってくれ」

「ハイハイー今いきます」

陽奈がUZIを肩掛けして声の方へいく

「…捻挫ですね。立てますか？」

「……これくらい」

片足を引きずりながら歩く

「なんだあれは！？」

その場にいた全員が振り向く

「う、嘘だろ……」

そこには三階建てのマンションを楽々こす巨大なゾンビが立ってた

初戦場（後書き）

ご意見感想お待ちしております

疲れを知らない世代がうらやましい(前書き)

少しギャグを入れてみました

疲れを知らない世代がうらやましい

ドンドンドンドン！

ダダ！ダダダダ！ダダダダダ！

「急げ急げ！Bチームのいるグラウンドに早く！」

「この道はダメです校内を通りましょう！こっちです！」
そう言つて窓ガラスをライフルのストックで割る

「早く！こっちです！」

武藤さんが手招きしてる

「全員入りました！」

西山が叫ぶ

「よしいくぞ！」

「この通路の先がグラウンドです」
渡り廊下走りながら伝えてくれる

「急ぐぞ！」

西山が渡り廊下の扉を蹴破る

ガシャン！

「な、んだと……」

扉を開けた先には巨大なゾンビがいた

身長が高いとかそう言う次元じゃない本当に体事態が巨大化したようなゾンビが立ってた

肌の色は茶色くなって目は白目になり見た目は普通のゾンビだがやはり巨大だナイトライト（夜中のグラウンドを照らすスポットライト）ぐらいある

「こ、こんなのがいるなんて……いままで確認されたなかで一番巨大だね」

隣で五十嵐が呟く

「襲撃当時はあんなやつ居なかったのに……いったい何処から？」
武藤さんが目を見開いて驚く

「……名前を決めないと」
ボソッと西山が呟く

『どうでも良いだろ！』

西山以外の全員でつつこむ

「けど、お前この後どう呼べばいいんだ？普通のゾンビも入るから何だか紛らわしいぞ読者のことも考えろ」

確かに普通サイズのゾンビも周囲をうろろしてる

「じゃあデカゾンビってのは？」
五十嵐が言う

「却下。次」

3秒位で流れる

「ゾンビデカは？」

「木下君。それでは何だかゾンビが刑事やってるみたいだよ。却下」

「じゃあ古西デカ」

「誰だよ！て言うかゾンビどこいった？」

悪ノリの成功した武藤君は満足そうだ

「……ジャイアントゾンビ」

俺が言ったら空気が止まった

……何だろうこのやっちゃった感は

ダンダン！

「発砲音？生存者がいる！」

その瞬間指示を出す

「木下と五十嵐！二人であのジャイアントゾンビの気を引け！」

「わかった」

「了解」

近接戦闘の得意な木下と中距離支援の得意な二人ならやってくれる
と見込んでの指示だ

「西山は長田教官に連絡その後は周囲のゾンビ掃討武藤さんと俺で生存者を助ける」

「イエス！ボス！」

「了解しました。」

「五十嵐さん援護して！」

早速木下がスパス15をギガゾンビ（めんどくさいのでこれからはこうします）に構え撃ちながらギガゾンビに向かい走る

タンタンタン

五十嵐が89式小銃で木下の進行ルートの敵を狙い撃つ

「食らえ！」

スパスから放たれたスラッグ弾がギガゾンビの肩に穴を開ける

「武藤君我々も急ごう」

「わかりました。」

だが次の瞬間

ドゴーン！

武藤君の体すれすれにナイターライトが倒れてきた
どうやらギガゾンビが倒したようだ

「大丈夫か？」

倒れたライトのそばにいた武藤にきく

「……」

「武藤？」

「……………」

バタリ

「武藤！」

そのまま前に倒れた

疲れを知らない世代がうらやましい（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

男にとって金・を打つのはなんとしても避けたいらしい（前書き）

下ネタは温かな目でスルry

男にとって金●を打つのはなんとしても避けたいらしい

今、俺の前で倒れた武藤君

「武藤！しっかりしろ！」

取り合えず武藤を仰向けにする

「どこをケガ……し……た？」

武藤の様子に違和感を感じる

「お前、大丈夫？」

股の辺りを押さえて水が無い魚みたいになってる

「お前、まさか……」

もしやとは思ったら

ゴトリ

武藤の股からソフトボール大のコンクリート片が転がり出る

「やっぱりか……」

ライトが倒れた際飛んできた破片が金●に直撃そして悶絶

そう言えば倒れた時も前に倒れたな

「しばらく休んで動ける用になったら援護しろ。無理するなよ」
微かに頷く

普通のゾンビは音に誘われるので（ギガゾンビは知らんが）喋る余

裕の無い武藤は大丈夫だろ

………ついてないな。武藤
取り合えず合掌

ゴスッ

M4カービンのストックでゾンビの頭を割る

「もう弾があまり無いな………」
最後のマガジンをリロードする

「誰が！助けて！」
女性の用な叫び声が聞こえる

「大丈夫か？」
ゾンビの頭を撃ちながらなんとか生存者の所に着く

「大丈夫か？って陽奈！」

「大久保さん！助けて！」
陽奈の膝に一人の兵士が苦しそうに倒れてる
陽奈は手にグロック19を握ってる
さっきから撃ってたのはお前か

「彼は？」

「あのでっかいゾンビに蹴られて………」

「下半身の感覚が無いんだ……」

「しっかりしろよ。西山！」

取り合えず近くをうろうろしてる西山を連れてくる

「武藤はどうしたんだ？何だか前屈みになってるけど……」

「金●を痛めた」

「ああ……痛いよね」

同情と哀れみに満ちた視線を向ける

「取り合えずこいつを運ぶぞ陽奈手伝え」

「わかりました。」

倒れてる兵士からグロックのマガジンを抜き取る彼の銃だったか

「行くぞ！」

M4を構える

ドンドンドン

「リロード！援護して！」

木下がスパスに12番ゲージ弾を込める

「ぐおおおおおおお！！」

ギガゾンビが唸りをあげて右拳を降り下ろす

ダンダン

「がああああああ！！」

右肩に親指位の穴が2つ開く

「五十嵐君ナイスショット。狙撃科に行ったら？」
無線で伝える

《そこまで遠くは見えないよ》

木下から30m位離れた場所から89式小銃を構えてた

「しかし強いな。頭を撃つても全然効かないし」

《他の場所も全然効かないしね。厄介だよな》

「取り合えず撃ちながら弱点を探すよ」

《了解》

リロードを終えたスパスを構える

「よし、運びだし完了！」

引越し作業員みたいになったが取り合えず近くにいたAチームの
兵士に渡した

「俺らも戻るぞ。」

「了解」

3人でグラウンドに戻る

「いつ見てもデケーな」

ギガゾンビが木下を正確に追い詰めてく

「いつつてかさつき見たばかりだけどね」

西山がつっこむ

「それよりどうする？生存者は救助したしもうここに用は無いだろう。早くトラックに乗って帰ろうぜ」

確かに助けた彼以外は全員ギガゾンビにやられたみたいだしAチームの話では避難民は全員脱出したみたいだしもうここにいる用は無いだろうだが

「だめだ」

「なんで!？」

「今トラックに乗って基地に帰ったらもれなくあいつも招待する事になるそれに俺はあのデカ物から逃げ切る自信がない」

「……確かにそうだな」

「大久保さん。何か解決策をあいっつに勝つには骨が折れるよ」

木下が土と汗と返り血でぐちゃぐちゃになりながらこっちに来る

「いい方法はあつた？」

五十嵐がこんなときでも爽やかな笑顔を絶やさず来る

「生きた心地がしないよ」

武藤がなんとか歩いてくる

「一つ作戦があるんだが乗るか？ある」

「マジで！どんな？」

木下が聞いてくる

「成功率は低いがいいか？」

『もちろん！』

全員が答えた

男にとって金・を打つのはなんとしても避けたいらしい（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

慌てないゝ慌てないゝ作戦会議作戦会議（前書き）

読む前に解説

徴兵された子供達が戦う際にに使う銃には
二種ある

一つ目はメインウエポン

アサルトライフルや狙撃銃ショットガン等の一番多く使う銃中には
剣や拳銃をメインに使う者もいる

二つ目はサブウエポン

メインウエポンが何らかの事情で使えなくなった際の代わり主に拳
銃やサブマシンガンがそれに当たる

最前線で戦う兵士には最大三つまでの銃の所持が許可されてる

慌てない！慌てない！作戦会議作戦会議

「よし作戦は以上だ。何か質問は？」

グラウンドのすみにある体育倉庫の中で作戦を話した所え？いつ話したって？ちよつと待って今から話すから

「さて？どうするかな？」

取り合えずギガゾンビがよそ見してる間に体育倉庫に避難して作戦を話す

「て言うかお前の考えた『エターナルフォースブリザード作戦』ダメじゃん」

ゾンビは音に引かれるため耳を潰せばこちらを認識出来なくなるそのため非殺傷武器である閃光手榴弾を使うと一時的に耳が使えなくなるためこちらが認識出来なくなるという仕組みだがギガゾンビには効かなかった

ちなみにエターナルフォースブリザード作戦は閃光手榴弾を投げまくって逃げようぜみたいな作戦である

「つまりだ奴は耳が使えず目で俺達を認識するわけだ」
これなら木下を正確に追い詰めた理由がわかった

「となると奴にはフラッシュバンは目眩ましぐらいか……」
ちなみにフラッシュバンは閃光手榴弾の事

「あいつは身長が高いから光が届かないんだよね誰が投げる?」
木下が聞く

部屋に「いや無理じゃね」みたいな空気が流れる

「無理だよな」

あっさり下がる

「じゃあ目を撃ち抜くのは?」

武藤が提案する

「ここには弾が無いM4カービンと89式が一つずつ(俺と五十嵐のやつ)にスパスと12番ゲージ弾が50発ぐらい」
木下のバックパックには弾が空なのに袖や足首等体の至るところから銃弾やナイフが探すだけ出てきた

「武藤の銃は?」

「まだ動く」

SCAR-Lを持ち上げる

「西山は?」

銃身が見事に曲がったMP5DSを無言で持ち上げる

「あー……サブは?」

すると西山がニヤリと笑う

「良いのがある。」

あまりに恐ろしい笑顔なので中身は聞かない

「陽奈は?」

「衛生兵だからあまり銃は持っていないんだけど……」

UZIとグロック19を出す

UZIはマガジン一本グロックは15発マガジンが二本

「……………よしなんとかかなりそうだ」

『マジで!?!?』

全員が驚く

「ああ、まずはだな……………」

俺は作戦を話し出した

慌てないゝ慌てないゝ作戦会議作戦会議（後書き）

何だかデジャヴを感じるな

反撃開始（前書き）

友人「なあ、ちょっといいか？」

作者「なに？」

友人「この「齋藤」ってキャラ誰？いきなりわいてきたんだけど？」

作者「齋藤？誰それ？」

確認中

作者「あつ……これはあれだ「西山」のはずが「齋藤」になつてるよ。誰？こいつ」

友人「いや知らねw

というわけで直しました

ついでに張り忘れた伏線も張りました

反撃開始

「ゴーゴーゴー！」

体育倉庫の扉を俺は蹴破る

「じゃあ打ち合わせどうりに！」

木下がスパスを構え走る

「じゃあ僕も」

近くの兵士の遺体からM16A3とマガジン数本を拾い上げる

「約束守れよ！」

西山が背中に大きな機関銃を背負い走る

「さあ、われわれも行きましょう」

武藤と陽奈がグラウンドに走る

俺の頭にさっきの作戦会議がリプレイされる

「まずはギガゾンビを攪乱させるために攻撃部隊を二つに分ける。
五十嵐、木下はそれぞれ別々に攻撃しろ。五十嵐は適当にその辺の
武器で戦って」

「私は全然ok」

二人が頷く

木下の持つてるスパスがギガゾンビを左に向かせると今度は後頭部に五十嵐の放つ銃弾が当たる

ニヤリと笑うと中から銃を取り出す

「だろ。俺のこれどう思うよ?」

齋藤が自慢げに出したのは分隊支援火器のミニミニ通称M249軽機関銃だった

「よしお前は手近な建物から敵に撃ちまくれ味方に当てるなよ」

$$T T T T T T \cdot - T T T T T T \cdot - T T T T T T$$

近くの校舎から手や肩が痺れないように休み休み機銃掃射が始まる時々混じる曳光弾が美しい流線形を描いてギガゾンビ周辺のゾンビやギガゾンビを撃つ

「陽奈このBチームの目的はこのグラウンドの確保だよな」

「はい、避難民の数が予定より多い場合はグラウンドにトラックを呼んでそこから兵士や避難民を退避させる計画でした」

「つまり、この隊は混成部隊か？」

「はい、通信兵や技術兵もいます」

脱出のための退路確保の部隊はあらゆる事態を想定して爆破や車の運転等あらゆる技術を持った兵士を配置する

「つまり爆薬かRPGがあるはずだ」
工作兵もいるはずだから

「俺と陽奈でそれを探す。武藤はある作業をしてくれ」

「わかりました」

「はい、大久保さん」

「よし、皆やるぞ！」

『おー！』

そして今に至る

反撃開始（後書き）

今度は普通に再編集出来ました

けど今度はブルーレイの接続が出来ない……orz

別行動は死亡フラグ（前書き）

今年中にはギガゾンビ編を終わりたいです

別行動は死亡フラグ

バンバンバンバン！

手に持ったグロックをゾンビの頭に撃つ

「陽奈！大丈夫か？」
慌てて後ろを向く

「大丈夫です！」
UZIを腰ために構えゾンビに弾丸を撃ちまくってる

「くそつ全然見つからない」
兵士の死体は見つけるが大概は普通の兵士が動いて襲ってくるのど
ちらかだ

「大久保さん！危ない！」
またギガゾンビが暴れたした
降り下ろされた拳が西山のいる建物に当たる

「西山！」
イヤホン型の無線機向かって叫ぶ

《大久保君！ギガゾンビがそっちに向かってます！》
無線機から木下の声が聞こえる

え、マジで？
と思いい後ろを向く

ギガゾンビが拳を振り回し他のゾンビを蹴散らしながらこっちに走

ってくる

「陽奈！」

啞然としてる陽奈の手からUZIを奪い横にいるゾンビに向けて乱射してできたスペースに陽奈を突き飛ばす

「大久保さん！」

陽奈が叫ぶ

ギガゾンビの足が俺に向かってつきだされるとつさに腕を十字に組み頭を守り足を踏ん張る

ドゴシュ

体に浮遊感がきた景色が前に流れてく背中で何体かゾンビとぶつかる感覚が背中から伝わる

ドガン

「グウツ！」

ライトに思いつきり背中をぶつける

「あ…ああ……」

立ち上がりたいが体がうまく動かない背中と腕と腹から尋常じゃない痛みがくる

「大久保さん！大丈夫ですか！？」
陽奈が走ってくる

「天使が来てくれたか……」

陽奈を見て言う

「長生きしますよ。」

そう言うのと治療を始める

《大久保君大丈夫？怪我してない？》

《大久保さん！あなたの事は今日の午後3時までは忘れません！》
心配してくれる五十嵐とあと一時間26分しか心配してくれない木
下からの無線がきた

だが俺は献身的に看護してくれる陽奈にも微妙な心配してくれる二
人より右側に目が釘付けだった

「大久保さん……」

途中から陽奈もそれに気づいた

無線機を右手に持っており顔が潰されている死体があった

最後に長田教官に連絡した兵士のようだが俺はそいつの背中の中に
目が行った

背中にA-T-4対戦車ロケットランチャーが担がれてた

別行動は死亡フラグ（後書き）

五十嵐「第一回、作者の疑問を晴らそう大会ー！」

大久保「……………おい、なんだこの企画は聞いてないぞ」

五十嵐「この企画は執筆中の作者がえ？なにこれ、食えんの？って言う疑問を読者に答えて貰おうと……………」

大久保「作者、ググレカスw」

五十嵐「第一回のお題は……………」

『ATってなんの略？』

五十嵐「物語りの最後当りに出てきた言葉ですね。ご意見ご感想お待ちします」

リアルでボス戦をやると普通にこうなる

「大久保さん！」

陽奈がグロックを撃ちながら叫ぶ

「あー全員よく聞けロケットランチャーを発見した。五十嵐、木下
退避しろ。」

《了解しました。》

《生きてたかーよかったよかった》
すると銃声が止む

「武藤！準備は？」

《OKです！》

荒い息づかいで答える武藤

「陽奈…立たせてくれ」

「はい！」

陽奈に肩を持ってもらいA T I 4を右手で持ち上げる

「あー！無理無理！超重い！」

いくら少年兵用でも弾頭含め5kgはある怪我した状態では流石に
無理か

「どうするか……」

衛生兵の陽奈に持たせるのは無理があるし

すると横から手が伸びてきた

「西山！生きてたのか！？」

横からA T I 4を奪ったのは瓦礫に埋もれ死んだはずの西山だった

「ふふふ……俺は生まれつきついてるからな」

機関銃を背中に背負い両手でA T I 4を持っている

「とつさに窓から飛び降りたんだ低いところだよかったよかった。」

よく無事だったな

「大丈夫ですか！？怪我とかしてませんか？」

陽奈がオロオロしながら尋ねる

「大久保とは違うんだよ。」

「…怪我してなかったらその口吹き飛ばしてやるのに……」

「はいはい」

軽く流してA T I 4を構える

「ぶっ飛べ！」

ドシュー

飛行機雲を造り一直線にギガゾンビの頭に向かってロケット弾が飛んでいく

ドガアアアアアン！！

「やったぜ！ザマーミロ！」

西山が空になったランチャーを放り投げる

「……西山」

「なんだ？！」

興奮してる西山を取り合えず振り向かせる

「次から撃つときは警告を忘れるな……耳が……」
隣では陽奈も同じように耳を押さえてる

「ご、ごめん……」

謝ったみたいだがあいにく耳が聞こえない

「大丈夫かい？大久保君？」

五十嵐が木下を引き連れやって来た

「ああ……耳以外は……」

キイイインって音で少し聞きづらいが聞こえなくはない

「全員無事か？」

武藤が走って聞いてくる

「武藤気を付けろこいつは俺らを殺す気だぞ」

「ごめんなさい」

謝罪する西山

「しかし大久保さんの作戦は心配しすぎだったかな？もう生きちゃ

いないだろうし」

武藤がギガゾンビの方を見る

「あれ？なんでまだ立ってるの？」

そこには顔の右半分が吹き飛んで左側の皮膚が無くなったギガゾンビが立ってた

「誰か冗談って言って……」

「武藤、準備OK？」

「いつでも」

赤いドクロマークのボタンが4つ位着いた5cm位の箱を取り出す

「それは？」

西山が聞いてくる

「今にわかるよ」

ギガゾンビが大股でこっちに向かって走ってくる

「今だ！」

同時に武藤がボタンを押す

ドガン！

ナイターライトの根元が爆発する

「うおい！」

「キャー！」

西山がその場に伏せて陽奈が近くにいた俺に抱きついてきた

「うお！陽奈！」

陽奈の心臓の鼓動が感じられる位に密着してきた。ヤベッいいにいる

「グオアアアアア！」

ギガゾンビが倒れたライトに足をつまずかせ顔から地面に倒れる

「よし！うまくいった！」

武藤が間髪入れずボタンを押す

ドガン！ドガン！

ライトが丁度ギガゾンビの頭当りに倒れてくる

ズウウウウウン！！

土埃に混じる血煙と尋常じゃない量の血が流れ出す

『やったー！』

皆一斉に喜ぶ

「やりましたね。大久保さん！」

「もしかして武藤に爆弾設置させてたのか？」

武藤に頼んだ事はこれだったのだ

「ああ……そうだね……」

陽奈がまだ首に抱きついてきてる

そのせいで陽奈の年の割には大きな胸が俺の胸に押し当てられる

「陽奈……その……胸が……あたってるんだが……」

少しポカンとする陽奈

次の瞬間には顔を真っ赤にして離れる

「……………大久保さんのエッチ……………」

「ええ？俺のせい？」

「熱いなお二人さん」

武藤君！誤解だから！

「うむむ……………私が狙ってたのに」

木下君は訳解らん

「皆……………あれ……………」

西山が指差す方を見る

200体位のゾンビがこちらに向かって歩いていった

「……………全員、残弾確認」

「弾無し。」

武藤がSCAR-Lを放り投げる

「上に同じく」

木下がパスを下に落とす

「西山は？」

機関銃ならまだ弾があるはずだ

「飛び降りた時壊れちゃった」

エヘッと笑う

「またそこら辺の武器で戦う？」

五十嵐がM16を捨てる

「陽奈……」

「空薬莢が中に詰まって使えません」

両手をあげる

UZIは蹴られた時に壊れたし残りの武器は無し

「他に作戦は？」

「……………無い。」

全員が死を覚悟した

リアルでボス戦をやると普通にこうなる（後書き）

ご意見感想お待ちしております

やっと一段落（前書き）

明けましておめでとうございます

微妙に今年中には間に合いませんでした

ガキの使い見ながら必死に書いたのでこれからも末永く宜しく願います。

やつと一段落

「ギガゾンビ 倒したはいいが 囲まれた」
武藤が一句読んだ

「アホなん？バカなの？死ぬの？」
木下が手酷く罵る

「そりやおま、この状況じゃ誰でも緊張するよ。そりや一句も読むよ！」

『読まねーよ！』
全員の息があつた

「けど……皆時世の句を考えた方がいいかも
さつきよりゾンビの包囲網が狭くなってるし」

「ここまでか……」
全員がうつむく
一人を除いて

「大久保さん……」
陽奈がこつちを上目使いで見上げる

「何だ？」
陽奈の上目使いに心射たれながら陽奈の目を見る

「いきなりですけど……人生最後なので……言わせてもらいます……
大久保さん、私あなたの事が……」

なんだこの状況？武藤からある種の怨念のこもった視線が痛いし五十嵐は柄になく、ニヤニヤしてるし西山は顔真っ赤だし木下は武藤とは違う殺気を感じるし、何この力オス。全員黙りこくってるし、誰かしゃべれよなんか気まずいよ

「す…す、す……………すk《全員！その場に伏せろ！》ひゃ！」

陽奈の言葉を遮る用に携帯無線から声がした。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！

とつさに陽奈を押し倒す

「大久保さん！、キャ！」

陽奈の上から覆い被さり守る用に地面に伏せる

「なんなんだよ！面白い時に！」

西山が叫ぶ

「あれを！」

木下が指差した方にはM2重機関銃で車上射撃を繰り返す軍用ハンヴィーが3台が止まってた

「……………増援？」

誰かが呟いた

「いつ呼んだんだ？」

「そう言えば最初に西山が呼ぶように言ったんだっただすっかり忘れてた」

《こちらスライカー1 どうぞ》

「こちら大久保。長田教官！これは一体？」

《かわいい教え子の帰りが遅いから迎えに来たのさ。よくやったな
お前たち》

「ありがとうございます！教官！」

今まで「俺様の辞書に『労り』『親切』等と言ふ言葉は無い！」とか冷酷無比なドＳ野郎って思つてたが心配してくれる時は心配してくれる優しさがあると

《大久保。陽奈から離れな。木っ端微塵にしてやる》

無線機からガシャンとM2のリロードをする音がきこえる

「悪いことは何も考えてません！ごめんなさいでした！」

《肉片にならなくなかったら早くこい！退路は開いてやる！》

—T₁—T₂—T₃—T₄—T₅—T₆—T₇—T₈—T₉—T₁₀—T₁₁—T₁₂—T₁₃—T₁₄—T₁₅—T₁₆—T₁₇—T₁₈—T₁₉—T₂₀—T₂₁—T₂₂—T₂₃—T₂₄—T₂₅—T₂₆—T₂₇—T₂₈—T₂₉—T₃₀—T₃₁—T₃₂—T₃₃—T₃₄—T₃₅—T₃₆—T₃₇—T₃₈—T₃₉—T₄₀—T₄₁—T₄₂—T₄₃—T₄₄—T₄₅—T₄₆—T₄₇—T₄₈—T₄₉—T₅₀—T₅₁—T₅₂—T₅₃—T₅₄—T₅₅—T₅₆—T₅₇—T₅₈—T₅₉—T₆₀—T₆₁—T₆₂—T₆₃—T₆₄—T₆₅—T₆₆—T₆₇—T₆₈—T₆₉—T₇₀—T₇₁—T₇₂—T₇₃—T₇₄—T₇₅—T₇₆—T₇₇—T₇₈—T₇₉—T₈₀—T₈₁—T₈₂—T₈₃—T₈₄—T₈₅—T₈₆—T₈₇—T₈₈—T₈₉—T₉₀—T₉₁—T₉₂—T₉₃—T₉₄—T₉₅—T₉₆—T₉₇—T₉₈—T₉₉—T₁₀₀—T₁₀₁—T₁₀₂—T₁₀₃—T₁₀₄—T₁₀₅—T₁₀₆—T₁₀₇—T₁₀₈—T₁₀₉—T₁₁₀—T₁₁₁—T₁₁₂—T₁₁₃—T₁₁₄—T₁₁₅—T₁₁₆—T₁₁₇—T₁₁₈—T₁₁₉—T₁₂₀—T₁₂₁—T₁₂₂—T₁₂₃—T₁₂₄—T₁₂₅—T₁₂₆—T₁₂₇—T₁₂₈—T₁₂₉—T₁₃₀—T₁₃₁—T₁₃₂—T₁₃₃—T₁₃₄—T₁₃₅—T₁₃₆—T₁₃₇—T₁₃₈—T₁₃₉—T₁₄₀—T₁₄₁—T₁₄₂—T₁₄₃—T₁₄₄—T₁₄₅—T₁₄₆—T₁₄₇—T₁₄₈—T₁₄₉—T₁₅₀—T₁₅₁—T₁₅₂—T₁₅₃—T₁₅₄—T₁₅₅—T₁₅₆—T₁₅₇—T₁₅₈—T₁₅₉—T₁₆₀—T₁₆₁—T₁₆₂—T₁₆₃—T₁₆₄—T₁₆₅—T₁₆₆—T₁₆₇—T₁₆₈—T₁₆₉—T₁₇₀—T₁₇₁—T₁₇₂—T₁₇₃—T₁₇₄—T₁₇₅—T₁₇₆—T₁₇₇—T₁₇₈—T₁₇₉—T₁₈₀—T₁₈₁—T₁₈₂—T₁₈₃—T₁₈₄—T₁₈₅—T₁₈₆—T₁₈₇—T₁₈₈—T₁₈₉—T₁₉₀—T₁₉₁—T₁₉₂—T₁₉₃—T₁₉₄—T₁₉₅—T₁₉₆—T₁₉₇—T₁₉₈—T₁₉₉—T₂₀₀—T₂₀₁—T₂₀₂—T₂₀₃—T₂₀₄—T₂₀₅—T₂₀₆—T₂₀₇—T₂₀₈—T₂₀₉—T₂₁₀—T₂₁₁—T₂₁₂—T₂₁₃—T₂₁₄—T₂₁₅—T₂₁₆—T₂₁₇—T₂₁₈—T₂₁₉—T₂₂₀—T₂₂₁—T₂₂₂—T₂₂₃—T₂₂₄—T₂₂₅—T₂₂₆—T₂₂₇—T₂₂₈—T₂₂₉—T₂₃₀—T₂₃₁—T₂₃₂—T₂₃₃—T₂₃₄—T₂₃₅—T₂₃₆—T₂₃₇—T₂₃₈—T₂₃₉—T₂₄₀—T₂₄₁—T₂₄₂—T₂₄₃—T₂₄₄—T₂₄₅—T₂₄₆—T₂₄₇—T₂₄₈—T₂₄₉—T₂₅₀—T₂₅₁—T₂₅₂—T₂₅₃—T₂₅₄—T₂₅₅—T₂₅₆—T₂₅₇—T₂₅₈—T₂₅₉—T₂₆₀—T₂₆₁—T₂₆₂—T₂₆₃—T₂₆₄—T₂₆₅—T₂₆₆—T₂₆₇—T₂₆₈—T₂₆₉—T₂₇₀—T₂₇₁—T₂₇₂—T₂₇₃—T₂₇₄—T₂₇₅—T₂₇₆—T₂₇₇—T₂₇₈—T₂₇₉—T₂₈₀—T₂₈₁—T₂₈₂—T₂₈₃—T₂₈₄—T₂₈₅—T₂₈₆—T₂₈₇—T₂₈₈—T₂₈₉—T₂₉₀—T₂₉₁—T₂₉₂—T₂₉₃—T₂₉₄—T₂₉₅—T₂₉₆—T₂₉₇—T₂₉₈—T₂₉₉—T₃₀₀—T₃₀₁—T₃₀₂—T₃₀₃—T₃₀₄—T₃₀₅—T₃₀₆—T₃₀₇—T₃₀₈—T₃₀₉—T₃₁₀—T₃₁₁—T₃₁₂—T₃₁₃—T₃₁₄—T₃₁₅—T₃₁₆—T₃₁₇—T₃₁₈—T₃₁₉—T₃₂₀—T₃₂₁—T₃₂₂—T₃₂₃—T₃₂₄—T₃₂₅—T₃₂₆—T₃₂₇—T₃₂₈—T₃₂₉—T₃₃₀—T₃₃₁—T₃₃₂—T₃₃₃—T₃₃₄—T₃₃₅—T₃₃₆—T₃₃₇—T₃₃₈—T₃₃₉—T₃₄₀—T₃₄₁—T₃₄₂—T₃₄₃—T₃₄₄—T₃₄₅—T₃₄₆—T₃₄₇—T₃₄₈—T₃₄₉—T₃₅₀—T₃₅₁—T₃₅₂—T₃₅₃—T₃₅₄—T₃₅₅—T₃₅₆—T₃₅₇—T₃₅₈—T₃₅₉—T₃₆₀—T₃₆₁—T₃₆₂—T₃₆₃—T₃₆₄—T₃₆₅—T₃₆₆—T₃₆₇—T₃₆₈—T₃₆₉—T₃₇₀—T₃₇₁—T₃₇₂—T₃₇₃—T₃₇₄—T₃₇₅—T₃₇₆—T₃₇₇—T₃₇₈—T₃₇₉—T₃₈₀—T₃₈₁—T₃₈₂

3台のハンヴィーが一斉射撃を開始した

「全員でハンヴィーまで走るぞ！何か反論は？」

無し！

「よし！行くぞ！」

こうしてゾンビをかくぐりハンヴィーへとたどり着いたのだ

やっと一段落（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

兵士の休日（地獄の二丁目）（前書き）

祝1000アクセス

これからも宜しく願います

兵士の休日（地獄の一丁目）

「イタタタタ……あの！この治療本当にあつてるのか？グア！」

俺は今初任務でいきなりボスと戦うみたいな暴挙を何とか切り抜けたとして俺を待っていたのは天道東先生てんとうあずまのありがたい治療（別名二度死ねる死の治療）だった

「大丈夫大丈夫私はベテランだから」
出血部分を包帯を巻きながら言う

「教本ではそんな巻き方じゃなイタタタタ！」
衛生兵ではないとはいえ応急処置の仕方くらい知ってはいるが見たことない巻き方だった

「失礼します。」
その時知り合いが入ってきた

「大久保君具合はどう？」
五十嵐がビニール袋と共に入ってきた

「やぶ医者にちりりy」
ザクン！

俺の言葉は途中で遮られた

い、今起こった事をありのままに話すぜ！
俺が五十嵐に医療制度の不満（主に天道先生の治療の荒らさ）を語ってたら外科医用のメスが俺の鼻先を掠めてコンクリートの壁にぶっ刺さったんだぜ！

そしてメスの飛んできた方には……右手に新たなメスを挟んでる天道先生が、いや、鬼がいた

「なんの話？」

医療用メスにしては先が尖ってるメスを手品の用に増やす

「い、い、いや今の社会問題についてちょっと大久保君と討論を……」

「はい！今の社会経済のアレがアレなのです！」

「全然解らん。」

ですよね！社会経済なんて話してないし

「何やら修羅場の匂いがする」

西山と木下が紙袋片手に入ってきた

ナイス！二人共ナイス！

「何しに来たよ？」

メスを机に広げた布の上に並べる

「大久保にお見舞いの品だ」

「マジで？」

「はい」

まず西山が取り出したのは

『たくわん』

「待てや。なんで？」

「実家からたくさん来たからおすそわけ」

「……………」

あまりの嫌がらせに言葉を失う

「僕はこれ」

五十嵐が袋から取り出したのは

『キムチ』

「……………好きだけどー！」
なんか腹立つ

「じゃあ僕は、はい」

木下が出したのは18禁のエロ本だった

「き、木下君……これは一体？」

「猿渡君からかりた」

さわたりたかし
猿渡尚通信科の人で俗に言う変態

「なんでエロ本なんだよ！しかもSM熟女ばかりだし！」
マニアックすぎる

「猿渡君いわく『大久保氏は年上に苛めて貰うのが大好きなのさ！
キリッ』って言ってたよ。」

そして女の子として大事な恥じらいがあまりない木下君はエロ本（
SM熟女）を白昼堂々と借りてきたと

人に見られたらどうするんだろ？

「俺にこんな趣味は無い！」

あつても世話好きな姉属性しかない！（美少女限定）

「わかった。じゃあ今度は大久保さんのベッド下の床下の二重底にしまった秘蔵コレクションにしますね」

……………あれ？

「それとも、部屋の本棚の裏にある隠し金庫にあるやつにします？
確か年上のお姉さん特集のはずです」

「ああああああああああああああああああああ！！」

な、何故だ！何故バレてる？！五十嵐にも教官にもバレないように
ひっそりと隠してたのに何故だ！

「五十嵐！お前スパイなのか！？」

「違うよ。」

五十嵐が苦笑いしながら否定
若干引いてる

「年上もいいよねーまあ俺はどっちでも良いけど」

共にエロ本を回し読みした仲の西山がバラすとは考えにくいし

「木下、お前……………どうやって？」

「暇潰し。」

ニツコリ微笑む

「それとも……本じゃあ退屈ですか？」

すると木下がベットのの上に乗っかってくる着ていた服のボタンを一つ一つ外してく。何だかひどく色っぽい

「ど、どうしたんだ？ 発情期に入ったのか？ 止める！ 服を脱ぐな！」
前が開いた状態から木下が体を預けてくる果物の用ないいにおいがする

「この前の陽奈ちゃんの件ですっかり差がついた感がありますからね……既成事実を作れば勝ちよ」

「五十嵐！ 西山！ 助けて！ 木下が壊れた！」

「無理。」

「リア充爆発」

五十嵐君！ 面白そうに笑うなそして西山はアップル（M67グレーネードの愛称）を仕舞え！ 安全ピン抜くな！
天道先生もカメラ用意するな！ 録画するな！

「だ、だ、ダメです！」

慌てた声を出して保健室に駆け込んできたのは陽奈だった

「そんな8時にもなっていないのにそんな事しちゃダメです！」
8時越してもでもダメだけどね

「早いもん勝ちよ」
そういつて顔を近づけてくる

「と、とにかくダメです！」

顔を真っ赤にして陽奈が止める

「お前ら！ここは病人や怪我人が養生する場所だ！遊び場じゃないぞ！」

すごい迫力で怒鳴るのは長田教官その後ろには

「あれ？武藤どうしたの？所属場所は別の場所じゃないの？」

「こいつのことも含め今から大事な話がある。全員よく聞け」
静まり返った保健室で長田教官がこつちを向いて話す

「大久保拓海、揮官を本日付けで第4機動偵察部隊隊長に格付けする！」

兵士の休日（地獄の二丁目）（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

地獄の黙示録って4時間もあるんだって。全部見た試しがないよ（前書き）

ゲオとかで借りてもしポート辺りで寝てしまっんですね

関係無いですねしません

地獄の黙示録って4時間もあるんだって。全部見た試しがないよ

「こちら閑古鳥かんこどり応答せよ」

大久保が機動偵察部隊隊長の伝えをきく少し前学校周辺の大通り

《閑古鳥、こちら親鳥どうぞ。》

大通りを見渡せる位置にあるマンションの屋上で市街戦用迷彩に身を包み同じように塗装された狙撃銃SR-25を構えた少年が無線機に話す

「2500m先にテクニカルと武装トラックが4台接近。検問場を強行突破したのち真っ直ぐそちらに向かつてる。どうぞ」

少年は頭に着けたフードを脱ぐ

男にしては珍しい肩までつく長い髪に整った顔は童顔で男と言えは頷けるし女と言っても頷ける紛らわしい顔をしていた

《閑古鳥、こちら親鳥。対称への発砲を許可する。殺しても構わん。よい狩りを。アウト》

「了解。アウト」

少年、植野うえの ゆう優は改めて狙撃銃のスコープを覗く

「こちら閑古鳥、カラスもりした聞こえるか？」

植野は強襲担当の森下朋希ともきに連絡をする

《はいはい。こちらサクッサクッカラスどーぞ》

「おい、またサクサクいつてんぞ。お菓子を任務中に食うな！」

《もっちゃもっちゃ……食べてない食べてない。天道先生に甘い物を摂りすぎるなって言われてるから。》
だがマイクの中からまだサクサク聞こえる

「とにかく、敵が迫ってる発砲許可も出てる。いつもどおり行くぞ。」

《あいあい。》
無線を切るとS R I 25に初弾をこめる

そしてテクニカルの荷台の機銃主の男の頭に狙いを着けた

ここは兵士養正学校に向かう盗賊の一団の先頭車両の運転席

「やっぱり襲うなら学校だよな。武器に食料が大漁にあるしそれに女もいるしな」

テクニカルの助手席にいる男が下品に笑う

「けど、女だったってガキばかりだろ。どこが良いんだ？」
運転手がきく

「お前例えばさ小さくてかわいい少女が涙目になりながら上目使いでこつちを見上げていたらどうよ？」おにいちゃん……もう許して……」なんて言ってきたらもう最高だな。」

「バカかお前。女はやっぱり年上だろ。溢れる大人の魅力にほとば

しる独特のフェロモン！ガキとは比べ物にならないくらいの完成されたボディーに経験！さらに人妻だったらもう最高だな。」

「ケツ、オバサンのどこが良いんだ？。」

「黙れ、ロリコン」

「ありがとぅ。最高の誉め言葉だ。」

「くっ……このへんて《おい！後ろ見ろ！》」

後続のトラックの運転手の声が無線機から聞こえる

「あ？何だ？」

ロリコンの人が後ろを見る

彼が最後に見たのは鼻から上が無くなった機銃主がバランスを崩して後ろのトラックの運転席に突っ込んでくシーンだった

パリン

ガラス瓶を踏んだ用な音の後運転手の顔に血がかかった

「う、うわあああああ！！」

何事かと隣を見た運転手がみたのは後ろを確認した体勢のまま首がきれいに吹き飛んだ同乗者の姿を見たたん彼は死にたくない！と思った

そしてシートベルトを外し錯乱した運転手は外へ飛び出した

機銃主で視界がふさがりコントロールを失ったトラックが来るとも知らずに

《こちら閑古鳥。花火を上げろ。》

「了解。閑古鳥」

そういつて森下は近くの布を払う

「でかい花火にするぜ相棒。」

取り出したのはMGL140グレーネードランチャー

窓から見た先には玉突き事故を起こしたトラックとテクニカル目と鼻の先で煙を上げてた

「食らいやがれ！」

ポンポン！

ドガン！ドガン！

「ハッハッハ！動かない盗賊はただの盗賊撃ってくる盗賊はよく訓練された盗賊だー！おらおらおら！」

脳内で『ワルキューレ騎行』を流しながらグレーネードを乱射する

《動かない盗賊はただの盗賊。撃ってくる盗賊はよく訓練された盗賊だー！》

耳に着けた無線機から森下の声が聞こえる

「……よく訓練された盗賊って何？」

またアイツの映画ネタかな？よく解らん？

とりあえずよく訓練された盗賊を狙って撃つ

『これは決闘ではない！誅罰だ！』
ちゅうばつ

テンションが上がった森下の雄叫びを聞きつつ銃の引き金を引くと10分

「親鳥、こちら閑古鳥。どうぞ」

《こちら親鳥。どうぞ》

「対称は全滅。繰り返す対称は全滅。至急回収班をよこしてください。」

10分足らずで50人程の兵士が全滅した

《了解した。二人は本部に帰投せよ。新しい配属先に移ってもらおう。》

それと同時に空薬莢を拾い集め狙撃銃やマガジンをアタッシュケースにしまう

《配属先ってどこかね？》

サクサク音をたてながらチョコバーを貪りながらきく

「解らん。とにかく早くいこう」

配属先が機動偵察部隊だと知るのはまた別の話

地獄の黙示録って4時間もあるんだって。全部見た試しがないよ（後書き）

ご意見ご感想アドバイスやアイデアなどもお待ちしてます

思い出話が長くなると歳よりって考えが歳より臭い（前書き）

おおくぼたくみ
大久保拓海

歩兵技能科

階級……二等曹長

使用火器… 89式小銃（今後変わることもあり） S I G P 2 2 6

本作の主人公新種のゾンビを討伐した功績により一気に昇進した。
年齢は16徴兵される前はオタクでクラスから浮いてた
家族は両親に妹が二人ただ母親と妹とは仲が非常に悪く父親は長い
あいだ海外出兵で本人的には家族は父親一人と想ってる

そう言えばキャラ紹介がまだだったので載せます

思い出話が長くなると歳よりって考えが歳より臭い

第1格納庫

高機動車両やAPC等の車両を保管、整備されてるこの場のハンヴィーの前に数人の人がいた

「植野優。階級は狙撃兵長です。よろしくお願いします。」

SRI25を背中に背負い股のレッグホルスターにUSP拳銃を仕舞って無表情で答えた

「森下朋希。階級は陸士長！好物は甘い物！よろしく！」

無表情無感情の植野に比べ明るく社交的で話しやすいタイプだ

……………背中ofMLGとMG4を除いて

「二人がこれより君たちの部隊の指揮下に入る。仲良くやるように。」

長田教官がM2機銃搭載のハンヴィーを背後に話す

「……………」

誰も話さない。五十嵐はニコニコしてるし木下は教官の前で堂々と雑誌読んでるし、西山はあくびしてるし、陽奈はオロオロしてるし武藤はそっぽ向いてるし俺は……………先ほどから頭痛が酷い

「では、この後早速任務がある。隊長はここに残るように。10分後に再びここに集合！それまでに装備を整えておく用に！では解散！」

長田教官の号令と共にさっさと居なくなる皆。足早いなーおい

「まずは、昇進おめでとう。大久保」

長田教官が労う

「……ありがとうございます。」

ヤベツ胃が痛くなってきた！

「早速だが、今回の任務だが………」

教官の話を聞きながらさっきの保健室での話が頭に流れる

「機動偵察部隊？」

最初にしゃべったのは俺だ

「この前の新種のゾンビを討伐したその手腕と指揮能力を上層部が目をつけてらしい。先の戦いで空気がひとつあったし人数もぴった
りだ。」

「もしかして……武藤も？」

後ろの武藤を指差しながらきく

「彼の部隊は壊滅したからなここに転属だ。ちなみに後二人くる。
狙撃手と投擲手だ」

「………本当ですか？」

最終確認

「本当だ。」

「やったね。大久保君。」「お、おめでとうございます大久保さん」
「これからよろしく。」「おめでとうのキスを……」

とりあえず木下に目潰しを食らわした

「聞ってるか？おい。」

「ヒヤイ！？も、勿論さ！」
なにいつてんの俺？

「……………」

いかん教官の目付きがヨ・ネスクラウザーばりにきつくなってる

「そ、そう言えば何であるとき僕を選んだんですか？」

「あのとき？」

「ほら、体育館で」

「ああ、あれか」

前回の戦いの際にBチームの救出を俺に任せた訳だ。色々あってまだ聞いてない

「兵士の勘だな。」

「え？」

「長年子供の兵士を見てると、こいつは優秀だな。とか、こいつは無理してるなつてのが解るんだ、その勘がこいつなら大丈夫って言うてたんだ。それだけさ」

思い出話を語る教官の顔はすごく優しそうだった

思い出話が長くなると歳よりって考えが歳より臭い（後書き）

ご意見感想アドバイス等お待ちします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2344z/>

生き残るには.....

2012年1月15日01時51分発行